文学雑誌 銀鈴

第貳拾號

銀鈴第貳拾號（毎月一回二十五日發行）
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可 明治四十年三月二十五日發行

銀鈴第貳拾號掲載目次

銀鈴社詩稿（短歌）……河野翠瀲
君と別れて（長詩）……牧岡けい子
銀鈴社詩稿（短歌）……小川石櫻等
つきぬ涙（小品文）……菅原紅雨
銀鈴社詩稿（短歌）……森脇桃村等
文藝雜俎（評論）……
昨年の詩壇　深編笠
寄贈雜誌　編輯子
文界片々　黒華生
銀鈴社詩稿（短歌）……菅原まさ男
感想欄……
和歌と俳句（其一）……
雜吟（俳句）……峯秋等
梧葉晴雨の卷（其二）……富田五呑
社告……記者
春の水（長詩）……馨
銀鈴社清規……
廣告……

禁轉載

銀鈴

第貳拾號

（明治四十年三月二十五日發行）

銀鈴社詩稿

河野翠瀲

あきたらず思ふと云いて反逆の雜兵
あまた立ちぬ我が胸
すでに君を戀ふるといへどとある日
の消き心にまた人を見ぬ
うぐいすは海のあなたのあけぼのの
國に啼くなり我等さびしき
戸は霧す君がこがねのさし櫛にほ
へる髪のうつくしきかな
春の雨女つくれるいにしへの日記よ
みながらうたゝ寢をしぬ
君れもふ長き年月腐れたるわが殘骸
に降れよ春雨
來る日も髪に香たき我が君は天女の
ごとく在りぬかたへに
忘るゝにあらず束の開懈怠なしされ
どみづから君を疑ふ
うちとけて物は云ひませ何となくあ
かずぞ思ふ春雨の家
早や一歩まへに何者かちどきをあげ
てせまりぬいかにかはせむ

君と別れて

牧岡けい子

黄葉反る秋にもあらず。
死の冷えにくだちゆく夜の
冬ならで陽炎もゆる、
洛東の珍の花蔭。
うまみきの香に酔ふ心地、
うら〳〵と春日ぞくゆれ。

大地に、隈なき光、
かくやくと足る日のはじめ。
小さき身もえ、やは洩さぬ、
捲かれては、いろ鳥うたふ、
音をも聽き、くゆりただよふ
美し香を呼吸しぬれど。

ああ心君とわかれて——
無人島蠱物巣立つ
うつろ穴目枯れの景色
乾反葉のかさゝ訪ふ、

かぎりなき寂寥に居り
潸然と涙ながるる

（如月十三日作）

銀鈴社詩稿

三島溪雲

大野分破鐘のごとき亂調に終日吹き
ぬ片側街を

八重垣鄕人

くろ髪はあえかにうつれのぞき見て
鏡のうちをうちやめる人

舟木柳村

春の風君より吹くやねがはくば鶯よ
しとみちびき給へ（洲洋兄へ）

鈴木曉星

ほまれてふ權威も知らずわが心盲目
のごとし君に堪へねば

小川石櫻

雜木の黃ばめる幹に時雨してあめつ
ち暗し古きけしきに

つきぬ涙

菅原紅雨

昨晩から降り續いた雪は未だ息まぬ、それに、山れろしの風さへ加はつて、身を刺し肖に泌み込むばかりの寒さ。春さんは、いよ〳〵今日出發して故郷へ歸らねばならぬことになつたといふ。自分は、今日を限りに、戀しい春さんと袂を分たねばならぬ。で、自分は朝、起きるが早いか、一二町しかない春さんの許へ駈けつけた。可愛そうに春さんは、何處となく憂に沈んだ顏色をして居る。

「能う來て下さいました。ああ眞面に嬉しい……」

といつた春さんの涼しい眼には、絕えぬ涙の光りが輝いて居る、自分は、春さんと對ひ合つて火鉢の側に座を占めた。暫し無言で居る、と、又しても此の一年間の戀の歷史が止度もなく繰り返される。自分が此の土地に來て、始めて春さんを見た時、好いたらしい女だと思つたこと。それから、四日五日十日二十日と經つうちに、自分ばかりではなく、春さんの心にも懷かしいといふ氣がさして來たらしく、何かにつけて春さんの、自分に對する態度がちがうて來たこと。冷たかつて、自分に手袋を編いて呉れたこと。自分が、獨身で居るので、不自由にあらうといつては、春さんも、時間に餘裕の無い身でありながら、自分の着物の調子から、洗濯、補綴等にいたるまで一切引き受けてよく世話して呉れたこと。また時々は。自分の下宿を訪れて、着物を疊んだり、座敷の掃除をしたり、飯を焚いたり、給仕をしたりして呉れたこと。學友やら知人から度々痛い忠告を受けたこと。其度毎に、口では立派に言ふて腹では泣いたこと。それを春さんに告げたら、春さんは、世の中が恨めしいといつて泣いたこと。ホトトギス所載の「野菊の墓」を話し合つては、いつも春さんが妾も終ひには民さんのやうな目に逢ふのか知らんといつて涙を溢したこと。大分世間が騷しいので、御互に切れてしまはうではないかといふ意味で——

今から考へて見ると實に殘酷なしかたであつたが——

長い〳〵手紙を遣つたら、春さんは、二三日間眼を泣きはらして、逢ふても別に何も言はず、ただ「口惜しい」といつては泣いてばつかり居つたこと。自分も人知れず何遍か泣いたこと。それから二十日ばかり經つと、親の仰付で、文丹へ歸らね

ばなふぬやうになつたといつて春さんが、血を吐くばかりに泣いたこと。こんなことを、取り止めもなく思ひ續けてゐたが、ひよいと氣がついて春さんを見ると、春さんも、何か深く考へてゐるらしく、眼には一杯涙を浮べて、火箸を以つて、靜かに灰をかきまはして居る、恐らく自分と全じやうに、深い追憶と悔恨とに小さい胸を搔き乱されゐることだらう。

「春さん……堪へて下さい……何もかも、私が惡るいのです…すみません、あなたの名譽を傷つけたのは私です…れ話しにいしことは胸一杯だけれどもう何も言ひますまい……が、春さん……二人は、なぜ斯う薄倖に生れたんでせう……ねえ、考へて見ると……。」

と自分は堪らずはら〳〵と涙を落して、

「……あなたの御親切は永久忘れやしません……」

言ふ聲はまさしくふるへてをつた。併し凛として力あるものであつた。肺肝を突き破つて出た響であつた。

「利男さん……妾の身を……この妾をふびんと思つて下さい……妾は妾は……一生涯あなたを忘れることは出來ません……偶にはあなたも思ひ出して下さいまし、頼りない身を、……

……ああ、これから何うすりやいゝんです……

……利男さん……」

春さんは自分の、膝に縋りついて泣いた身も心も絶え、よとばかり泣いた、自分は、もう何うすることも出來ぬ、いきなり春さんをしつかり抱いた。熱い涙はとめどもなく頰を傳うて春さんの白い、頸に用捨なく落ちかかる。

「いつまで居つても名殘は盡きません。あなたも先を急ぐ道だ。これてれ分れしませうから、ずいぶん体をだいじにして下さいよ、よ。……」

と言つた限り、取り縋る袖を拂つて自分は立つた。外に出た。雪は絶えず降り重り、風は狂ふが如くに吹き暴れる。ああ、この吹雪い中を春さんは供をも連れずたつた一人、つきぬうらみを殘して歸途につくであらう。……見かへれば春さんは、椽先に出て悄然と自分の後影を見れくつて居た。(完)

この一篇は、私がほんの處女作です。こんな詰らぬものを臆面もなく掲げて、と御嘲ひ下さつても致方はありません。が、篇中の「春さん」に對しては幾分の同情を表して頂きたい。(紅雨)

銀鈴社詩稿

とも知らず若き女のうるはしき心の　嵯峨の里人
國は早くすさべり

君一語壯美をほめぬいにしへの樣と　舟木波秋
霧ふる中の湖畔に

枯蘆は音しぬ春の水の隈やはらの風　福間如舟
は南より吹き

春の雨道をいそげる人妻の袖にしづ　須崎隆一
くし美くしや降る

人呪ふ古き社の大杉に凶の夜すがら　春子
嵐するかな

みこころは嚴のみ廟このいのち仰せ
畏こみささげまゐらす　すみれ女史

雪解の水の早さにいく度か書きても
かげぬ君れもふ歌　立石洲洋

わだつみの大きこころに白光はさせ
りと思ふあゝ威なるかな

うちつけに物は申さむ白き蝶花より
花に醉ひめぐるなり　森脇桃村

蕭殺の冬の野にある大木に亂調子し
ぬ夕ぐれの風

戰慄す野分の朝の枯木みな劍のかた
ちし禁しむるかな

町女房煙草のむ人黑髮のよきひとつ
どふ春の夜の家

野の末の氷れるごとき森の沼の白き
花かや人づれなる　後藤藤朗

また今日も北氷洋の中にして小人と
語るわびしさに居る

▲丙午の雲石歌壇紙面の都合により次號▼

文藝雜俎

昨年の詩壇（其三）　深編笠

○歌集にして刊行せられたるものには、與謝野晶子女史の「舞姫」故落合直文先生の「萩之家歌集」窪田通治水野葉舟共著の「明暗」竹柏園同人の「あけぼの」晶子女史の「夢の華」等その他二三種はあらう。「明暗」「あけぼの」には首肯し難い點もあれど「舞姫」「夢の華」に至りては、明治文學史を飾るに餘りあるものだと信ずる。

○長詩界に於ては、「東海游子吟」の著者土井晚翠氏を筆頭に、小原無絃、横瀬夜雨、前田林外、岩野泡鳴、吉野臥城、兒玉花外、相馬御風、河井酔茗、高安月郊、山本露落、大塚甲山、三木天遊等、多くの詩人を算し得れ共、我等は、その所謂御苦心の作なるものを拜誦する毎に、未だ嘗てこの光彩あるわが日本詩壇のために悲まぬことが無い。

○所以いかにとなれば、今より、斯壇の大家島崎藤村氏數年前の作を返り見て、爾來いかに趣味の變遷が甚はだしかつたかを思ひつゝ、尚ほ藤村氏や故人外山正一氏やの格調に隨喜せる前項十數氏の凡作劣作に接するからである。中には半獸主義を唱へる泡鳴氏一派の所謂幽玄調（我等は之を牛硬晦澁を作とよぶ）作家もあらう、天遊氏の如き、メメ〳〵と女の泣いてるやうな作風もあらう、我等は何れにしろ「それが大嫌ひな讀者である」を自白することを憚かちぬ。

○今や、斯樣な作家にかゝづらッて、上ッすべりの詩を論ずべき時間を持たぬ、長詩は駸々として長足の進歩をなしつゝあるのだ。

○久しく作者の誰なりやを知らしめなかつた腰辨當森鷗外氏の作の如きは、飄逸にして老巧、洒脫にして清淡、確かに一流派を開かれたものだと云つて善かろう

○蒲原有明氏の作は其の前年に比し、數を減じたけれども、亦作風の變化を示してゐる。

○薄田泣菫氏は詩集「白羊宮」一卷を著し、童謠歌の一体を拓いた。「あゝ大和にしあらましかば」「望鄕の歌」「金星草の歌」「月見草の歌へる」「都大路」「夏の朝」等は傑作といふ評判であつた。

○與謝野寛氏の詩は勁詩社派を代表して新躰の思想及び技巧を試みられたものだ。「牡丹花」「車」ふたなさけ」等は長篇のうちの傑作で、其他短篇にも、自在なる語法句格の用ゐられたものが多い。

○北原白秋氏のうちに「たもひ田の詩」「靈場詣」「解纜」「我」「長月の一夜」等の佳作に乏しからぬことを發見した。

○平野萬里氏の「怪異」「寢られぬ夜」辻村鑑氏の「浪の音をきけ」長田秀雄氏の「海底」茅野蕭々氏の「懈怠」秋庭俊彦氏の「悲の花」「月見草」「君戀し」高田浩雲氏の「運動會」末吉安持氏の「瀛車の旅」及び石川啄木茅野蕭々平野萬里北原白秋與謝野寛五氏同題競作「花ちる里」等は特に驕るべき佳作だと思ふ。

○吉井勇氏の「罪の城」平野萬里氏の「沓の音」は作者に在りては相應に苦心せられたものであらうけれども、讀者には夫れだけの興味が受取られぬ。

○石井柏亭氏は畫家だけれ共、亦悔り難き長詩の才を有して居る。

○詩集にして刊行せられたものには伊良子清白氏の「孔雀船」薄田泣菫氏の「白羊宮」小原無絃氏の「花の詩」前田林外氏の「花妻」土井晚翠氏の「東海游子吟」詩文集には水野葉舟氏の「あらゝぎ」河井酔茗氏の「玉蟲」等があつた。

○以上は、甚だ粗漏な調査で又正鵠を欠いだ觀察であらうけれど、幸ひに讀者の賢察を願つて筆を擱く。

（完）

寄贈雜誌

編輯子

△浮城（四の四）　へき生の「年賀狀を見る毎に文字はよく書きたいものだといふでも思ふ。同じく賀正でも筆のしッかりしたのは何ッとなく餘計に目出度いやうな心地もするし、第一上手な文子で自分の名を書かれるのが新年早々甚だ快い譯だ。」別天樓の「些細な事のやうだが、俳句に假名遣ひの讓つてゐるのは面白くない、俳句專門の雜誌でも此点に十分注意の行屆いてゐるものは殆んど無いと言ふてもよい。」等あり。

△蛻殼（一の一）三尺の「文字書くことも英語にてウヲイテングと、但し發音も何も滅茶なれど覺え居たる男の、或時人の前にて何うしても思ひ浮ばぬに、やがてロシテングゞ。あとで詰れば、何でも裏へ天狗が入つたと記憶して居りましたので。」あり。

△箭（丁未第一）　萬里生の「苟も詩歌を作らうと志す程のものは眞面目でなくては叶はぬ、それにどうもふざけてゐるらしい人が少くない。作るならば眞に價値あるものを作る、少くとも作らうと思はねばならむ

。自己を僞つたり、他人を眞似たり、でたらめを並べたりするのは易きに就くさもしい心掛けである、恥ずべきである。そんな事ではろくな者が出來やう筈がない。いゝ者を作るには大なる覺悟がいる、進んで難路を開く勇氣がなくてはだめである。」あり。

△藻の花(三の一二)　孤軒の仕入帳に先輩の年齢がある、四方太露月碧梧桐(三十五)虚子風骨紅緣(三十四)青々(三十九)牛伴不折(四十二)漱石(四十一)子規先生も生ていたゝ漱石とをない年だ。

△シブキ(二の五)　青嵐の「仮令撰句の標準　如何ほど高くしても、佳句名吟のみを得ることは六つかしい、現に甲の撰者が秀逸とせしものも、乙の撰者は之を捨てゝ毫も顧みぬ、其實例は誰しも常に目擊しつゝある。されば一千二千の句中から僅に四五句を撰拔してもゝ、それが必しも名吟とは限られぬ、只其撰者一人の嗜好に叶ふたと云ふに過ぎない、撰句以外に千金の玉璞か潛存して居るも測られぬ。」あり。

△其他、岩菜籠(第八)△サヽヤキ(二の一)△朝虹(三の二)△山陰公論(第五)△無限思潮(三の二)△明ボノ(第拾)

文界片々

黒華生

◎四月の雜誌「新小說」には土肥春曙氏の飜譯小說及ひ田口掬汀氏の新作掲載せらるべしと。

◎歐米漫遊中なりし戸川秋骨氏は先月飯朝し、目下西洋物を骨子とし創作に從事せりと云ふ。

◎女流作家小山内八千代女史と婚せる画家岡田三郎助氏は、博覽會美術審査員に任せられたり。

◎大坂毎日新聞社の懸賞小說に當選せる小笠原白也氏の「嫁ヶ淵」は東都の書肆金尾文淵堂より出版せらるべしと。

◎興謝野寛氏は今夏新詩社の社友と共に、北海道に旅行せらるべし。

◎伊國詩人カルデュッシ氏は、豫て危篤の由傳へられしが先月遂に永眠せりと。

◎東京市に於て募集せる市歌審査委員を上田萬年氏鳥居忠氏岡谷季雄氏上眞行氏坪谷善四郎氏湯本武比古氏戸野周次郎氏等に囑托せりと云ふ

◎丸見鴻水氏の筆に成る新聞紙の沿革は、極めて興味ありとせらるゝが、目下「山陰新聞」に載連中なり。

◎川上櫻翠氏の詩集は「東歌」と題し出版せらる。

銀鈴社詩稿

菅原まさ男

あたたかきみ胸に生ひて美くしくにほへる花よ戀草といふ

愚にも物怖ぢすなる君とのみ思ひてありぬ果敢なごころに

憂愁はまろ寢ふたりを十重二十重かこみぬ涙こほる冬の夜

北海にひと日浴みして君に燃ゆ熱き心も棄てなむとしぬ

よろこびぬ憂ひぬ泣きぬれのぬぎぬこの戀ごろもはたいかにせむ

ああ今宵とはの別れと美くしき涙は降りぬ君と我とに

感想欄

○和歌と俳句——(一)——

▲或る宴席で和歌が善い俳句が善いと云ふ大議論を拜聽したことがある、而かも夫れが智識と趣味とに飲げた先生同士の名論卓說であつたから堪まらない。ユメな事實はそんぢよそこふにも毎々あることだらう。

▲下手な俳句をヘバリ出すより巢林子の作でも讀んだ方が何れほど增だかしれない、一年程熱心に熟讀して見給へ俳句の千や二千はれ茶の子で出來る譯さ。

▲俳句の下手はまだいゝが和歌の下手と來たら、カラれ咄になつたものにあらずサ。

▲俳句に飽いたものは川柳に往け、和歌に草臥れたものは朴山人のヘナブリに宗旨換をするがいゝ。

▲奇麗な躰裁をして居て俳句のツマラヌのは「時好」だらう。

▲青々といふ俳人は、あれで仲々如才がないさうだ。

▲自分は俳句の讀者にはならぬ、ツマラヌものでも自分で作つて自分で發表して見たい。(玄々)

▲和歌の作者になるは、極めて易い。俳句の作者になるは甚だ難い。併し平凡な作家で滿足するものは此

限に非らず。

▲俳句の運座といふに出て見たいと思ふが、まだその機會に接せぬのを遺憾とする。（梅泉）

▲雜誌心の華の和歌を眞面目で見るものがあるから可笑しい。（紫露子）

▲病床に臥せり〻時、平素往來する書物屋の丁稚の、歌集「みだれ髪」を携へて來れる嬉しかりき。

▲君は歌咏み給ふやと、見知らぬ人に突如尋ね、らるるは愧しきもの也。

▲ふと道連れの人、何くれと咄すうちに、「明星」派は面白しなど、言ひ出でたる、床しとも床し。（孤峯）

▲句を作る人と歌を詠む人とは、風采でよく分るものだと、友が云つた。

▲俳句は六號活字に、和歌は五號活字に組んだのが、氣持がいゝ、四號以上にしたのは見ふれたものでない

▲句集を見やうと思ふと、肩が凝つて仕方の無いものだ、矢ッ張り散文の途切れ〳〵に出てゐる方が退屈せぬやうだ。

▲和歌を作るには俯向いてに限るし、俳句を作るには仰向たい方が都合が能い。

▲雜誌の卷頭に、麗々しく俳句の出てゐるのも妙なものだ。こんなことを思ふのは或は僕一人かも知れぬ（落々閣）

▲鳴雪氏といふより鳴雪翁といふ方が、やさしくッてなつかしい。

▲故人尾崎紅葉先生の句は、艶麗で暖か味がある、日本派の句は蒼勁で冷ッたい。

▲稻青氏の「埋火や虎も鼠の志」といふ句が分ふないと云つてる友人がある。（甚之助）

▲前號の本誌、深編笠の「昨年の詩壇」中に「玉野しづく氏は實際女性かと思ふばかり優艶な調を獨占して居た」とある一節に對し「其裏面には男子なれどといふ意味あるらしく候、然れども實際作者は性に女候へば この批評は妙なものに御座候」と、東京の某氏より申越されたり。女性にあふずといへる根據も疑はしければ、信用ある某氏の注告に從ひ、爰に訂正す（記者）

▲次號原稿締切四月十日▼

雜吟

禪寺は寂寞として冬の月　石櫻

冬早き土人の窓や落葉する　峯秋

禿山へ風がもて行く落葉哉

肩かけの見かへる女同士かな

家移りの毛布に包む厨具哉

白酒の醉れもしろし雛の主

我庵は鳥の巣ほどの廣さ哉

烟毒に枯れし田麥や忘れ霜

二の渡し三の渡しや春の川

春の水

　　峯

愛の御神の彩吹息、

虹の輪なして海も山、

果ては大地の混沌に、

消えしかあらず、春の水。

梧葉晴雨の卷（其二）

富田五呑作

○梧月◎羽風◉靜處△鐵笛▲水人評

◎○豚賣りて來る支那人や冬の雨

▲未だ遇はぬ事實故とふず◉果して冬の雨か知らん

△黑すみし棕櫚の折葉や冬の雨

○上五不明▲形容まづし◉同感△僕はれもしろいと存候

江岸に並ぶ裸柳や冬の雨

○むしろ冬の月？▲兎に角に動かむ◉裸柳とはいかゞ

▲○◉福引や詩を題したる貝杓子

○詩はかたき感あり「發句をかきた。」としてとる▲そうしてなら僕も◉僕も

◎○◉猿曳の猿の烏帽子を直し鳧

▲ふかしといふべからず

雪一塊墨に磨りけり　筆始

○不自然▲墨に磨りけりと續く所難あり◉未だ句を成さず

元日や鶯古き草の庵

▲古きといへるはくさし
年の著歓入に一人殘りけり
▲上五僕には不明◉僕にも。併し何れにしても
大躰の句が
初鶏や鞍馬の里の家五軒
▲クラマを知らず何ともいへず◉知らんでも讀
めた句なり
▲○連翹や茶寮に通ず小草道
▲小草道茶亭に對してはいかゞと思へど△小草
道は調和せず◉同感
△寒食や障子に動く鳥の影
◉障子に映るといふ意なるべきを動くとはいか
が▲飼へる鳥ならんも、分らず△飼鳥ならぬ方
として
白梅や丘上に庵二三軒
▲ふるはず◉生にして硬
▲○柵の外に顔出す豚や暖かき
◎◉○顔を鼻としたし◉鼻として僕もとる
△蘆の芽や棹さし過ぐる蜆舟
▲蜆舟は殊更なり
灌茶屋に燒蛤や風光る
◉調和を得ず
陽炎や屋守の走る塀の上
○とかげならん▲感じよからず
永き日や舟にて詣す玉津島
◉句を成さず
△雉鳴いて北嵯峨村に家疎なり
◉これも
初雷の雲晴れ行くや雉聲
▲きり合せたる句なり
▲○雉鳴いて山畑豆の花黄なり
▲いろにすきし也◉此頃の豆の黄花は何豆なる
や菜の花にはあらざるか
けん〳〵と二聲寒し籔雉子
▲をさなし◉同感
蝶飛んで寺は淋しき花菜哉
▲寺はといへるまぎらはし
△▲出代や見かへる里の紙鳶
▲他にあるやうなり△陳なれども◉大あり

●社告●

▲懸賞俳句募集　△課題春季雑吟△二十句以下△選者羽風梧月両氏共選△同一の句二通に明記△天地人六名へ本誌一ヶ月分贈呈直接購讀者は前金中に加算△銀鈴社宛たるべし　〆切四月十日

▲前回募集の俳稿　目下選者の手に於て選抜中、次號に發表すべし

▲和歌無料添削　和歌初學者のために添削返草の途を開く、社友と否とを問はず希望者は題隨意一ヶ月二十首以内半紙に淨書し、石見國邑智郡田所村大字下龜谷菅原正男宛て、返早用貳錢郵券添付送稿ありたし。一週間以内に修補の上返附すべし。請求あれば本誌上にも掲載す。

▲感想欄募集　「和歌と俳句」に關する感想を募集す、一般の締切期日に遵ひ續々寄稿ありたし。取材の範圍を擴くし可成多數採用すべければ躊躇すること無く投稿せらるべし。

▲正誤　前號の重もなる誤を正す。翅白の詩めはみ紅雨の詩くはへ八頁最終の歌われかたしはわれ力なし散文さらばよ古里の下作者秋泉の二字を脱す。

銀鈴社清規

一　文藝を愛するものは何人と雖も本社社友たることを得べし
一　社友は銀鈴誌代六ヶ月分以上前納者たることを要す
一　社友は社内同人を經て本誌編輯其他の議に參與することを得
一　社友には有効期間毎月銀鈴を無代配送すべし
一　支部(社友五名以上)社友は本社直接の社友と同一の待遇を得べし

投稿集募

一　和歌　一　俳句　一　美文
一　小說　一　評論文　一　長詩
一　小評　一　小品文　一　社友月旦
一　文壇消息　一　歌會句會の詠草

用紙は半紙一枚二十行とし一行二十四字詰。種類を異にしたるものは各別紙に認むる事。〆切に毎月十日。投稿は其幼稚なるものと雖も可成補正採用す。秀逸なるものは社中同人の議を經て薄謝を贈る。社友以外と雖も投稿隨意但賞を贈らず。

銀鈴第貳拾號（毎月一回二十五日發行）明治四十年三月二十五日發行
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可

●廣告●

文藝美術月刊雜誌

茶話會

本誌定價一部金六錢郵税五厘六ヶ月郵税共參拾六錢一ヶ年仝六拾六錢郵券代用壹割增○詳細の會則は本誌に在り本誌見本一部郵券六錢

○廣告御依頼の向は照會を乞ふ

第一號四月六日發行　切望寄稿

六癡社文章部教授太田靜處先生主幹

本誌掲載項目○講壇○論議室○詩文室○詩文室の内には漢文○漢詩○叙情文○叙事文○尺牘文○和歌○新體詩○川柳○俳句等あり○圖書室○應接室○喫煙室○紹介室○掲示室○談話室○餘興室の九室あり又臨時に一壇六室を開く○毎號賞を懸けて寄稿を俟つ茶話會は輕薄なる書生文士輩の入るを許さず大方高雅の君子淑女の來會を望む

風流韻事を極むる本誌の如きは實に空前にして又絶後なりと謂ふを得可し希くば一卷を把て眞價を知れ

發行所　東京芝區西久保八幡町十八番地　**六癡社**

銀鈴定價表

定價	郵税	廣告料
一部　金五錢五厘	金五厘	一行五號活字二十四字詰貳拾錢半頁貳圓
六部　金參拾錢	……	前金切は帶封に朱圏
十二部　金五拾五錢	……	

銀鈴第貳拾號

明治四十年三月二十三日印刷
仝　四十年三月二十五日發行

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二
編輯兼發行人　河野岩雄
仝　縣仝　郡川本村大字川本五三八
印刷人　原八太郎
仝　縣仝　郡仝　村大字　仝五三八
印刷所　邑智活版所

發行所　島根縣邑智郡田所村　銀鈴社